

# 「日曜日」に

吉田 一 栄

ひさしぶりの休日、中国縦貫道路を走る。

免許とりたての妹が、助手席で覚えてたの知識をふりかざしてさわぎたてる。だけど、まっすぐにのびた道を走る、あのスピードの緊張感は、快いものだ。

そういうえば、中学・高校時代と夢中で追いつづけた白いボール。捻挫ではれあがった足首も、不思議とコートの中では痛みも感じなかった。ただ、ただ、ボールを追うという緊張感に酔っていた。頭の中には何もなく、コートの外から飛んでくる「左」「足もと」「とれるノ」、一つ一つの単語に身体だけが反応する。考えはじめると動けない。一瞬一瞬を身体にまかせて、後には緊張感が残る。

今では、あまり味わえなくなってしまったようだ。ボールと日々を過ごしているのだからか、自分では懸命に生きているつもりだけれど。

そう、車を走らせる時、そして、茶室には

いった時、少しはあの感覚がよみがえる。

今日はあいにくの雨。水煙の中で視界がはっきりとしない。白いモヤをかけたような行く手に、つい、肩に力がいいる。そんなにはげしい雨でもないのに、一〇〇キロメートルのスピードが雨をフロントガラスにかなりきつくかけあがらせている。まるで海辺でむかえる嵐のようだ。『雨のあし、あたる所通りぬべく、はらめき落つ。』そんな一節が思い浮かぶ。光源氏がその生涯において、たった一度むかえた不遇な時期の、結局は彼を救うことになるはげしい雨の形容だ。源氏の君はこの雨に、何を想ったのだろう。ただ恐れただけか。都を偲んだだけか。

時雨、五月雨等、雨を表わす言葉が多いように日本人は雨を好んだようだ。私もまた、御多分にもれない。何より落ちついた気分になれるのがよい。産寧坂や馬籠の宿は、しっかりと湿っているほうが印象的、昔の人達も、秋の長雨にももの想いにふけた。

コンサートの帰り道、電光にうきあがった平安神宮の応天門をバックに、白い糸のような雨が落ちていたことがあった。天と地とが何本もの糸でつながっているような雨をながめていると、雨をながめることのみに専念し

てしまい、頭の中には何もなくなる。にもかかわらず、立ち止まることなく、身体のみが家路を急いでいた。

やさしい雨のくれる落ちつきと、はげしい雨のもつ緊張感。感じるのは私だけではあるまい。

お茶のけいこの時の雨もいいものだ。いやながら始めたお茶ではあるが、途中放棄するのめくやしいからつづけている。そんな程度のけいこでしかないが、近頃、やっと、日常生活とお茶とが結びついてきた。形ばかりの作法等、何にもなるものかと、生意気にも思っていたけれども、一つ一つの所作が、自分のほうから見るのでなく、他人の立場にたつ、思いやりあるしぐさなのだと、あたりまえのことにいまさらながら驚いて、居つまたいだした時、窓から見える雨の様はきびしくて、おのづから背すじがのびた。

京都の町が見えると、ドライブはもう、終りだ。またしばらくは、雑念の中を走りまわらねばならぬことだろう。

(よしだ かずえ 通信教育部総務課)